

## P-62

Phalloidine 投与ラット肝細胞内磷脂質に対する電顕細胞化学的観察

西村俊夫、鶴原敬三、中尾家蔵、  
坂井田紀子、森井外吉  
(関西医大・病理)

著者らは、最近、phospholipase A<sub>2</sub> またはCを用いた脂質消化法による電顕細胞化学的研究で、正常ラット肝細胞内の生体膜系に散在する反応産物は、肝細胞内のある種の生体膜磷脂質からの消化反応産物であろうと推論した(Acta histochem. cytochem. 21:73, 1988)。なお、この反応産物は、エチオン投与や絶食などの処置ではほとんど変動しないが、コラルジル投与による磷脂質脂肪肝で、肝細胞内に著増する粗大な膜様構造物に一致して多量にみられた。今回、体重250g前後のメスラットに500μg/kgの phalloidine を0.5 mlの生食水に溶かしたものを、毎朝1回1週間連続して腹腔内に注射し、投与終了後の肝組織を採取して、脂質酵素消化法やタンニン酸固定を試みて、電顕細胞化学的に観察した。なお、対照群として、生食水0.5 mlのみを同様に投与したものをを用いた。対照群と比較して、phalloidine 投与群の肝組織では、胆管周囲の肝細胞小胞体腔内に中等量の電子密な沈着物が出現し、それに一致して電顕細胞化学的術式後の反応産物を認めた。それで、小胞体腔内沈着物を磷脂質分泌障害の所見と考按した。

## P-63

ウシガエルの腹膜上皮における炭酸脱水酵素活性

市川安昭、杉本啓治  
(日本医大・解剖)

ウシガエルの腹膜上皮内に特徴ある形態を示し、炭酸脱水酵素(CA)活性をもつ細胞を見出した。腹膜上皮の大部分を占める一般の中皮細胞に比べ、この細胞には微絨毛が密生し、ミトコンドリアが豊富にみられ、また、細胞の外側部や基底部では形質膜が複雑に陥入している。本細胞の分布と数を次のような en face 標本作製法により調べた。すなわち、試料を冷95%エタノールで固定して粘膜や筋層をできるだけ取り除き膜片とし、CA反応液(Hansson法)に浮遊させ活性を検出した。この膜片を95%エタノールに浸し中皮側をガラス面に貼り付け乾燥後、再び95%エタノールで湿らせ、中皮以外の組織を機械的に剝離し観察した。その結果、陽性細胞は胃・小腸・大腸および腹壁の漿膜上皮に限って分布していることが解った。陽性細胞の数は胃と小腸に多く、大腸や腹壁では少なかった。次に、CA活性の細胞内局在を電顕で調べた。活性は細胞質の基質にみられ、主に細胞の外側部や基底部に局在していた。特に、形質膜の陥入部に活性が強く出現していた。なお、本細胞は変態前の幼生にはみられず、変態極期(st. 23)から出現する。